

夏の空と僻村の往診

山本太郎

六月中旬から七月上旬にかけてバブアニューギニアを訪れ、八月上旬から中旬にかけて中国雲南省で調査をした。盆の期間には山中湖に近い奥道志でキャンプを張った。

バブアニューギニアは、ニューギニア島のほぼ中央部、西半分を占めるインドネシア領バブア州との国境近くの町パニモで、現地の人々への診療を行った。雲南省ではチベット自治区との県境に程近い高地で住民の健康調査を行った。帰国後、しばらく留守にしていた日本で、家族と夏のキャンプに行った。昨年は裏磐梯で、今年は奥道志だった。

バブアニューギニアでは、ポートモレスビーからウェワクまで飛行機で飛び、その後、東部ニューギニア戦線最後の地だというウェワクからパニモまで船で移動した。パニモまでの移動に使った船は、走行しながらでないと真水をつくれないうい

旧式の船舶で、乏しくなった真水を補給するため、海上を蛇行しながら航行した。ウェワクからパニモまで、直線で二五〇キロほどしかない距離を四日かけて移動した。

日の出から日没までの時間を、甲板近くの舷側で海と空と雲を見て過ごした。水平線の先にある赤道直下の空には、沸き立つ積乱雲が青い空に浮かんでいた。そこで、本を読み、音楽を聴いた。よく聴いたのは、ブラームスの交響曲だった。一番と四番。

青い空と雲をこんなにも見た記憶はあまりない、と思った。一〇年分以上もの空と雲を見た気がした。色とかたちが、時刻の移り変わりによって一つひとつ微妙に変化していく。蒼みがあった白、紫を帯びた白……。そんなさまざまな色を帯びた雲のかたちが変わる。一つとして同じかたちはなかった。

へくものある日／くもは かなしい／くものない日／そらはさびしい。八木重吉の「雲」という詩だ。心に沁みる気がした。

そして夕暮れ前には、一日の終わりの始まりを告げるように、熱帯のスクロールが甲板を濡らした。スクロールが上がった後の空は茜色に染まった。

青い空と白い雲、暑い夏は、学生時代に漕いでいたボートを記憶の底から呼び起こした。ボートを漕いでいた時の記憶は、いつも夏、しかも暑い夏に結びつく。青い空に白い雲が浮かび、海は太陽の光を反射し輝いていた。

二〇数名の仲間と年間一〇〇日近い合宿をし、そこから大学へ通った。そんな生活を七年間続けた。大学と合宿所を往復した回数は一〇〇〇回を超える。毎日艇を漕いでいた土地は、波の静かな内海のさらに奥まった入り江にあった。入り江の中には、小さな島と呼ばれる小さな島があり、その島が、防波堤の役目をして、その場所を外界から隔離していた。島には、小さな小屋のような家が一軒だけあり、昼間は、初老の男が家の裏に作った小さな畑で農作業をしていた。

まだ水の冷たい二月、水が温み、新緑とともに新入生を迎える四月、高い湿度の六月、梅雨が過ぎると、そこは一気に夏を迎え、青い空に積乱雲が立ち上った。そんななか、全力でボートを漕いだ。その間、時間が止まった気がしていた。それでも夜は訪れ、夜になると星が輝き、波間に夜光虫が光った。

パニモの町では、一週間かけて二〇〇人ほど現地の人々の診察を行った。外傷後の後遺症に苦しむ人、マラリアや結核が疑われる人などなど。一人ひとりを問診し、診察し、薬を手渡した。しかし、ハンセン病で四肢の先をすべて失った人に対しては、その手足をゆっくりと撫でることしかできなかった。それでも、彼は診察の最後に「ありがとう」と言ってくれた。中耳炎で苦しんでいた子どもの耳が聞こえるようになったとき、その子は本当にうれしそうに笑った。その子の母親は涙を流した。豊かな日本にいと、多くのことを享受できる。それが時に他者への思いやりのなさにつながることはないだろうか。今を生きることに、傲慢になってはいけなかった。

*

八月の中国は、飛行機で上海から雲南省の省都昆明に入り、昆明から大理、麗江、香格里拉（シャングリラ）へと車で移動した。昆明で一八〇メートルだった標高は、大理、麗江と過ぎるにつれて高くなり、香格里拉では三三〇〇メートルを越えた。昆明からの通算の走行時間は一〇時間を越えた。大理では洱海を東に、蒼山連峰を西に見ながら車を走らせた。麗江では、長江の上流にあたる金沙江を見下ろし、街の北に位置する玉龍雪山を見上げた。

そのとき急に、なぜ人々は高地を目指したのだろうか——と

思った。

雪で覆われた山群が蒼い空に映えた。この地に暮らす納西族がこの山を聖地だと考えるその理由が分かる気がした。

そして麗江から香格里拉へ。シャングリでは高原の道路から左右に草原が広がっていた。三階建ての大きなチベット族の家々が点在し、一つひとつの家が高く旗を掲げる。大人二人が手を広げてようやく届くほど大きな丸太を大黒柱に使った家は、通常一階がヤクを始めとする家畜の住まい、二階に人が、そして三階が冬の間の食料や飼料の保存庫となる。丸太の切り出し、乾燥から始まって、完成までに七、一〇年ほどの期間を必要とする。人々は、その生涯で家を建てることを目標とし、家を建てたことを誇りとするという。

高地の朝夕は冷涼で、日没後や早朝の最低気温は零度を切った。人々は夏でもストーブを焚いた。小さな窓から射す日は薄く室内を照らした。そんな家で、人々はバターのためぐりと入った茶を飲み、たわいのない話に興じた。大人も子どもも、老人も。ヤクの乳で作ったチーズとパンを片手に。

そんな家々を訪問しては、聞き取り調査と健康調査を行った。ここ二〇年ほどの間に急速に進んだ近代化が、彼／彼女らの健康に何がしかの影響を与えている可能性があるのか、否か。それを調べるのが調査の一つの目的だった。調査では、チベット高原の東に暮らす人々の間で、高血圧や肥満、糖尿病といった慢性病が急速に増加していることがわかった。しかも、標高

が高い地域に暮らす人ほど、そうした疾患に脆弱である可能性が示唆された。それは、放牧を主たる生業にし、酸素濃度の低い高地で日々、家畜を追って移動する生活への適応と引き換えに、人々が受け入れざるを得なかった脆弱性である可能性がある。それは、わたしの研究上の主題でもある「環境適応と健康」という問題につながる。

わたしたちは「健康とは、周囲の環境への適応の尺度である」という定義を置く。ここチベット高原で見られたような、過去の環境適応が現在の不適応を準備するとすれば、わたしたちは何を為すべきか。問題の解決は簡単ではない。しかし、わたしたちはそうした課題に取り組む必要があると考えている。

調査を行った時期、わたしたちが家々を回った高原は新月を挟んだ時期だった。夜調査からの帰路、やや小高い道の上から空を見上げると、月のない上空には銀河が流れ、銀河を挟んでアルタイルとベガ、デネブがくっきりと見えた。夏の三角だった。「もしかして、星が見えれば」と持参した『アメイジン グレイス』とシュールベルトの『冬の旅』をかけてみた。アレサ・フランクリンの歌う『アメイジン グレイス』と、フィッツシャーディースカウ(ディートリッヒ)の『冬の旅』が、高原の大地に響いた。

旅は、共同研究者であり、長年の友人である中国人と一緒にだった。さまざまな話をした。高地の町に多く植えられた柳を見た彼は、中国では古来、柳の枝を折って友を送るという話をし

た。柳の枝は、生命力が強くてどこにでも根付く。これから旅に出る君もそうであって欲しいということだと言った。その彼は、星の輝く空を見ながら「宇宙(そら)には、未来がありますね」と言った。

*

中国から帰国した東京は灼熱だった。久しぶりに顔を合わせた九歳になる息子は、夏休みの自由研究のテーマも決まらないのに、キャンプを全身で楽しんでいた。テントでは「オレ、一人で寝るから」と言った。昨年と比べて、また一つ大きくなっていた。

彼が大人になった後の世界がどのような世界になるのか、わからない。だが、バプアニューギニア、中国と回り、わたしたちがそれに対して負うべきものは確かにある。そんなことを考えた夏だった。

(了)

ハンナ・アーレント新刊「9月20日刊行」

反ユダヤ主義

ユダヤ論集1

初めて公刊されるものも多いユダヤ論集成全2巻。1は『全体主義の起原』に連なる長大論文「反ユダヤ主義」や『アウフバウ』記事など一九三〇―四〇年代。大島かおり・矢野久美子他訳 六七二〇円

アイヒマン論争

ユダヤ論集2

「パリアとしてのユダヤ人」「シユテファン・ツヴァイク」など有名論文を紙頭に、六〇年代『イエエルサレムのアイヒマン』刊行をめぐる重要文書類などを収める。齋藤純一・山田正行他訳 六七二〇円

(価格は税込)

* 映画「ハンナ・アーレント」のご案内

マルガレーテ・フォン・トロッタ監督が10年の構想をへて映画化。10月26日(土)より岩波ホールほか全国順次公開。配給 セテラ・インターナショナル